

[COMMUNION]

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.html>E-mail: comm.tko@nskk.org

PHONE: 03-3433-0987

FAX: 03-3433-8678 Diocese Office



第9号 (通巻1244号)

2013年3月31日

編集: 広報委員会 委員長: 渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園3-6-18

《シリーズ・宣教協議会の5つの提言から その①》

レイトウルギア／祈り・礼拝すること

司祭 ステパノ 卓 志雄 (タク・ジウン)

「原点回帰」。すなわち、「自分が原点であると思つた場所に帰ること。初心に戻る」と。を意味します。キリスト者において常に神に立ち返るために忘れてはいけない言葉です。特に教区成立90周年を迎え100周年に向かつてスタートしているわたしたちは深く考えなければならぬ言葉でもあると思います。

去年9月「いのち、尊厳限りないもの」―宣教する共同体のありようを求めて―というテーマで日本聖公会宣教協議会が行われました。宣教協議会では様々な議論が交わされ、その中で聖公会が大切にしてきた教会の5つの要素、すなわち、①み言葉に聴き、伝えること(ケリユグマ)、②世界、社会の必要に応え仕えること(ディアコニア)、③生活の中で福音を具体的に証しすること(マルトウリア)、

④祈り、礼拝すること(レイトウルギア)、⑤主にある交わり、共同体となること(コイノニア)に基づいて「日本聖公会へ宣教・牧会の十年」提言」が出されました。取り上げられた5つの提言は今、原点に立ち返らなければならぬわたしたちに対して大変重要なことを教えています。その中で今回は「祈り、礼拝すること(レイトウルギア)」について取り上げたいと思います。

「レイトウルギア」は新約聖書が書かれた際に用いられたギリシャ語で、「人々の(公共の)奉仕(働き、業務)」という意味です。紀元前5、4世紀古代ギリシャでは市民に限らず在留外人をも含めて公共の目的のために私財支出をもって奉仕すること、を富裕者に義務づけた制度が



あったと言われています。キリスト教の時代になると、レイトウルギアは「神に対して当然行すべき奉仕」として理解され「神に呼び集められた者の集いである教会が行う公的な礼拝」という意味として使われるようになりました。

「レイトウルギア」は、神が人類のために、キリストにおいて、キリストを通してあらわされた喜ばしい啓示に対する人間の答えです。

またみ言葉と御体、御血に与ることを通して2千年前イスラエルで行われたイエス・キリストの死、復活、昇天を記念して、「今」「ここで」思い起こし、わたしたちの経験として再現し、派遣されて行くことです。またキリスト者として福音を

証し、世界、社会の必要に応え仕え、交わることを通してこの世の中に神の国を実現していくための、最も根本的な務めでありキリスト者の原点であると思います。

おわりに、カンタベリー大主教であったウィリアム・テンプル大主教(1881年〜1944年)が語つた言葉を通して、罪と死の古い支配の力に打ち勝たれた復活の主イエス・キリストへの「原点回帰」について考えてみたいと思います。

「礼拝は、私たちの全ての本性を完全に神に従わせることです。礼拝は、聖なる神によって私たちの良心を取り戻すことであり、神の真理によって私たちの魂が豊かになることであり、神の美しさによって私たちの思いが清められることであり、神の愛に心を開き、神のみ旨に人間の意志を従わせることです。そして神を尊ぶこれらのすべては、人間にできる最も偉大な体験です。」

(教区事務所宣教主事)

主教と共に日曜学校を語る会



日曜学校スタッフ連絡会の主催で1月26日(土)に聖バルナバ教会を会場に「主教と共に日曜学校を語る会」を開催した。43名(21教会)の参加者があり、あらためて関心の高さを伺わせる。今回はその時の主教のお話しとその後の質疑応答などから現在の日曜学校について考えた。

子どもたちを神の家族として

主教 大畑喜道

「あなた方は…聖なる民に属する神の家族であり…」

(エフェソの信徒への手紙 2・19)

今日私がお話ししたいテーマは、みんな神の家族ですね、ということ

私が子どもの時に通っていた聖マルチン教会は、当時、成増にある幼稚園を借りて礼拝をしていました。祭壇も椅子もありませんから、朝、日曜学校の先生たちはその準備をすることから始めます。その作業を子どもたちも一緒に手伝われるわけですが、その椅子を並べる役割があるということが、礼拝で聞いたお話よりも、強く印象に残っています。それは多分、私は教会の一人の家族として迎えられている、「あなたが来てくれないと教会が始まりませんよ」ということを感じていたからでしょう。それが教会に行き続けられた理由の一つだったと思います。

教会にとって子どもたちはどう

いう存在なのでしょう？ 私たちの一人の家族だという認識が、どれ程あるでしょうか？ 私たちの次の世代を担ってくれる存在だと思っっている方が多いかもしれませんが、決してそうではありません。主役は誰かというところ、子どもたちもみんな主役なんです。「あなたがいないと教会は成り立たないんですよ」、これが日曜学校の中に込められた重要なメッセージだと思っています。

大学生の時に、教会委員の方と「大学生だけに日曜学校を任せておいていいんですか？」という議論をしたことがあります。自分たちはもつと別の大切な働きをするから、子どもこのことは大学生にでも任せておけという考えの人が多かったように思います。

でもやがて大学生がいなくなり、教える先生がいなくなると、どうしたらよいか分からなくなってきた。日曜学校も礼拝があつて、なんとなくお話しをして、終わったら子どもたちを楽しく遊ばせる、ただ漫然と続けているだけになってきた。真剣に子どもたちと教会が目指す方向に向かつて歩めるか、私は日曜学校の礼拝が、教会にとって大事な礼拝の一つだという認識を持っているかが

日曜学校を豊かにする一つの鍵だと思っっています。

ある教会では「子どもとともに祝うユーカリスト」という礼拝をしています。全ての教会でやりなさいというわけではありませんが、その中で大事な部分があると思っっているのは、子どもたちがパンを分かち合うことによつて、私もこのパンを隣の人に分け与え、その喜びを分かち合う仲間としての責任があるということ、小さな時から目に見える形で伝えられることだと思っっています。

教会に集うものは、子どもでも大人でも全員が神の家族です。そしてその家族が共に学び合うことが重要です。私たちのしていることが、教会が目指す方向に向いているか、ある種のカリキュラムが必要かもしれません。

実は少し古い資料ですが、アメリカ聖公会では幼稚園から中学生まで3年周期のカリキュラムがあります。教師が学ぶガイドブックや子どもたちへの毎週の通信



レター、副読本もあります。これをそっくり日本に当てはめることはできないでしょうが、日曜学校がどういう方向で共に生きていくかを話し合い、考えることは非常に重要です。

日曜学校の先生たちが、常に子どもに対して何を伝え、どう子どもたちに育ってほしいか、神様の家族の一員としてどういう信仰を養い育てることが出来るか、共に考える時を持つてもらいたい。このアメリカ聖公会の資料を見てもらっても分かるのとおり、これだけ真剣に子どもたちに関わっていることを認識していただきたい。そして、もし子どもが熱を出して休んでいると聞いたならば、手紙を出す、必ずお祈りする。大切なのは先生たちが「あなたが来てくれなかったことは、とても悲しいです」という思い、また「あなたが教会に来てくれたことは私にとって喜びですよ」という思いを真剣に伝えていくことです。そうすれば時間はかかるかもしれませんが、少しずつ変わっていくと思います。

私たちは子どもたちをどう見ているでしょうか？どれほど私の仲間、私の家族として真剣に受け入れているでしょうか？その子どもがどんな

悩みを持って、どんな思いで過ごしているか、ともに祈っているでしょうか、もう一度考えていくことが必要です。それを続けていくことが出来れば、神様はきつと素晴らしい実りを与えてくれるでしょう。子どもが来なくて「開店休業なんです」と



声を挙げ、お祈りして、手紙を書き「あなたのために祈っていますよ」と言ってお祈りされるような日曜学校の先生でいてほしいと思います。

(文責 広報委員会)

日曜学校の今の課題

当日は、大畑主教のお話しの後に質疑応答と3つのグループに分かれて、各教会の課題、問題点と今行なっている良い点や希望的なことについて話し合った。

まず、「各教会で使っている式文、聖歌集が違うので、統一したものが必要ではないか」という質問が出された。それに対して主教は「歌一つ

歌うにしても、そこに込められた思いがある。聖歌集・式文には、どういう子どもになって欲しいかという方向性が大切。今はそれが定まっていないので、丁寧に土台を固める学が必要」と答えた。

また、課題としては、子どもが集まらない、スタッフがいらないなど根本的なものから、各教会の様々な個別の悩みまで幅広く出されたが、その中で気になった最近の課題の一つに、「保護者との関わりをどう築いていったらよいか」というのがあった。日曜学校に参加する子どもたちは、比較的低年齢の子や遠くから来る子が多く、親と一緒に参加するケースが多い。親が信徒であれば問題は少ないが、そうでない場合は親への働きかけが重要になってくる。ようするに親が行かせたいと思うような日曜学校でなければ、子どもたちを毎週連れてこない。

そこで、大きなジレンマを抱えてしまう。日曜学校では子どもたちを窮屈な場所ではなく、できるだけ親のびと過ごせる場所にしたいが、親が日曜学校に連れてくるのは、いわゆる「落ち着きのある良い子」になるだろうことを期待しての「しつけの一環」か、そうでなければミッ

ション・スクールに入学させたいかである。はたして親が連れて行きたい日曜学校は、子どもにとって魅力のあるものになりえるか？そんなことを考えさせられた。

難しい問題だが、やはり日曜学校の本質を理解して、保護者の方に丁寧に伝えていくしかないのだろう。ただ、スタッフが足りない状況で、そういった親へのケアをしていくのは簡単ではない。教会全体の総力戦が求められるところだろう。

今は昔と違って、子どもが来るということには多くのハードルがある。大人の礼拝の片手間でやっている集まらない時代なのだ。それゆえ、主教が述べるように、スタッフ、牧師、信徒が真剣に祈り、考え、取り組まない現状は変わっていない。

おそらく現在の日曜学校は、いくつかの盛んな教会を除いて、ほとんどが子どもたちの人数は一桁（しかも5名以下）で、多くの教会で日曜学校を開いていない、または出来ないうような状況である。しかし、そんな中で日曜学校を再開し子どもが増えているという教会もある。あきらめずに、希望と喜びを持ってこの働きをこそ続けていくことを願う。

(日曜学校スタッフ連絡会・渡辺)

司祭と語ろう(その6)

司祭 中村 淳

今回は、現在東京聖マルチン教会で司牧されている中村淳司祭に、信徒の太田直人さん、根岸恵子さんからお話を伺っていた。

― 先生は東北の遠野がルーツだとお聞きしましたが。

中村 ずっと知らなかったのですが、父の祖父、私から見ると曾祖父に当たる人が遠野で生まれました。ただ農家の三男坊だったので、北海道に渡り、そこで商売をしていたようです。



― そのことを東北に行っていた時に知ったそうですが、どういうきっかけで分かったのですか。

中村 それまで遠野のことはいっさい聞いたことがありませんでした。ただ一昨年の9月に仙台基督教会の信徒である叔母が亡くなり、葬儀の時に親戚の人と話して分かったんです。

でもその話を知る前に、自分

でも釜石に行く時に遠野を通って行くのですが、何故かものすごく惹かれるのを感じました。

― それは不思議ですね。

中村 仙人峠を越えて遠野の方を見た時は、まさに桃源郷のように見えました。

― 確かにものすごく綺麗なところですよ。お父さんも東北の生まれなんですか。

中村 父は函館の生まれです。学校へ行くために東京に出て、

学生の時は赤坂に住んでいました。就職すると世田谷の深沢に住むようになり、母はその下宿先の娘なんです。

― 先生が生まれたのは深沢なんですか。

中村 そうです。でも生まれてすぐ杉並の方に引っ越しましたけれど。

― その頃、教会との繋がりはあったんですか。

中村 それこそ、ルーツは曾祖父にあって、函館で結婚して何人か子どもが生まれたのですが、厳しい環境でみんな亡く

なったらしいんです。唯一残ったのが祖母で、その祖母も1歳ぐらいの時に死にかけました。その時助けてくれたのがコルバン診療所というイギリスの宣教団体の診療所だったんです。

― それでクリスマスちゃんになったんですか。

中村 命を助けられたという思いがありましたから、曾祖父も曾祖母も祖母も一緒に洗礼を受けたそうです。それ以降、父も父の兄弟たちも聖公会で洗礼を受けています。

― 先生は自覚的に教会に行くようになったのは幾つぐらいの時ですか。

中村 中学ぐらいですかね。その頃、東京聖十字教会に行っていて、その時の司祭からサーバーをやれと言われたことが大きなきっかけだと思います。

― 礼拝で役割を与えられたということですね。

中村 しかも中学ぐらいになると生意気になって、自分で聖書を読み出しました。私は洗礼を受けたのも幼児洗礼ではなく、中学の時なんですよ。

― でも、先生の中にはおばあ

「司祭の二の1冊」

『マルティン・ルター』

―「ことばに生きた改革者

徳善義和著
岩波新書2012年刊

司祭 杉山修一

「ことばに生きた改革者」という副題がこの本のすべてを物語っている。宗教改革者として知られるマルティン・ルターのコンパクトな伝記がルターによって刊行された。聖公会



にいるとあまり話題にならないルターであるが、聖公会の特徴である祈禱書はルターの影響を受けてカンタベリー大主教トマス・クランマーが作った。聖餐論などもルターの神学に共通する。礼拝で聖歌を歌う伝統もルターによって始められた。

「神はわがやぐら」などルター作の聖歌に親しんでいる方も多いのではないかと。ルターの始めた宗教改革は中世から近代へとヨーロッパを移

行させた比類ない出来事であった。カトリック教会が支配し、作り上げてきた世界観と聖書のことばによって真つ向から対峙して歴史を変えたのである。本書はその改革のために聖書を徹底して読み、神からの良心に従って「ことば」に生きたルターの姿を余すことなく描いている。ルターはカトリックという巨大なシステムによって神の「ことば」が人々から遠ざけられている現実を変え、聖書を民衆が読めるようにすることに力を注いだ。そしてルターは聖書をドイツ語に翻訳する。民衆は初めて自分の言語で神の「ことば」を体験することになった。

著者はこのルターの「ことば」の命がけの格闘を歴史的事実に即して叙述する。

ルターの「ことば」に一点集中した人生をたどりながら、著者もまたルターがそうであったように「ことば」の持つ力と恵みを実感していることがわかる。

ちゃんが命を助けられたことが、キリスト教と結ばれるルーツとしてあつたわけですよ。

中村 それが明確になったのは神学院に行つてからです。

それまでは命を助けられたからクリスマスチャンになると

いうのは、ちよつと違うんじゃないか、クリスマスチャンというのは聖書を讀んで、勉強して納得し洗礼を受けるものだと思つていましたから、そのことは人に言えませんでした。

― 先生は、それこそ猛烈サラリーマンだったようですが、それまでのお仕事をやめて神学院に行くきっかけは何だったのですか。

中村 そう、月180時間くらい残業していました。ただ父が亡くなつてすぐくらいに、牧師推薦で教会委員になり、会計をまかされたんです。そうなる教会に行かざるを得ないわけですよ。そのうち母が癌になり医者には余命3週間と言われました。病院からの帰り道に何か

に頭を叩かれるような電流が流れるような経験をしました。

― それがきっかけだったんですか。

中村 今思えば、すごく疲れていたのでしょうね。仕事をしていたんで



く基準と教会の中間の基準は違いますから、どうしても咬み合わない時がありしんどいわけです。そんな中で礼拝に出ると明日から頑張ろうという気持ちになる。自然と礼拝で養われていたんでしょ

う。もちろん聖職の道に進むことも大変だと思いましたが、同じ大変なら価値観一つにして生きたいと思いました。

― 奥さんはびっくりしたんじゃないですか。

中村 私がそのことを彼女に話

した時「いつ言い出すかと思つてました」というようなことを言われました。

― うすうす感じていらしたんですか。

中村 もちろん賛成ということではなく、受け入れざるを得ないということだったんでしょ。

― 一年間東北で働いておられた感じたことはなんですか。

中村 これは東北の加藤主教さんがよく言われるのですが、この世界は幸せで祝福された世界ではなく、しんどくつて悲惨さに満ち満ちている。でもその現場に確かにイエスが共にいる、そう感じられたことが一番の恵みでした。

― この先どんな牧師になりたいですか。

中村 いろんなことがぬけて、柔らかく脱力した、みんなが安心して話せるような、でも存在感があり生の力を感じさせる、置物みたいなおじいさんになりたいですね。

― なるほど。

中村 でもきつといやみなおじいさんになるような気がします。

受難週に読まれる聖書の中で、ひととき私の心に響くのが「洗足」の物語です。カール・バルトがどこかで、「洗足」は古代教会のサクラメントであつた可能性があると書いていましたが、それは大いにあり得ることだと思います。

当時のパレスティナの中流以上の家には、客のために、足を洗う盥が用意されていました。水を満たし、捨てるのは召使ですが、彼らも客の足を洗うことはありませんでした。それは召使ではなく、奴隷の仕事であつたからです。ですからペトロがイエスの行為をとめようとしたのも、無理はありません。

《聖書を開いて》⑦

ヨハネによる福音書13章1～15節（聖木曜日）

司祭 広谷 和文

できなかつたのでしよう。こうして、忘れられていった「洗足」ですが、忘れられたのは「洗足」の式ばかりではなく、「互いに足を洗い合いなさい」というイエスの心も忘れられていったのです。

現在、「洗足」の式が再認識されてきたのは嬉しいことです。それを通して、私たちがイエスを裏切り、見捨てて逃げ去つたにもかかわらず、そのイエスからゆるされ、受け容れられた弟子たちの物語を追体験し、イエスの振る舞いの中にキリスト教信仰の神髄を見ようではありませんか。

第2回世界聖公会平和協議会

—開催に向けて— 主教 大畑 喜道

洗礼者ヨハネは混乱と荒廃の世界に向かつて声をあげました。その声は当初本当に小さな声だったかも知れない。しかし私たちは今のこの世界に向かつて正義と平和のために声を上げ続けなければなりません。決して私たちは諦めてはならない。この世界に神が切望する平和な社会が完成するまで声を上げる責任があります。

今年4月16日から22日まで沖縄で第2回世界聖公会平和協議会が開催される。第1回は2007年11月に韓国で、「朝鮮半島の平和統一のため」という主題で開催された。大会には、韓国、日本の聖職信徒をはじめ世界各国の聖公会から代表者が出席した。おもに朝鮮半島の分断状況や平和に

対する議論と、キリスト教教会の宣教課題としての取り組みを模索しつつ、アジア世界と全世界の平和との関連性を検討した。全世界聖公会の諸教会の協力を得て、今まで以上に積極的に平和統一のための諸活動を展開していくことを決議した。2008年の日本聖公会第57（定期）総会において「この大会で採択された宣言に賛同し、殊に朝鮮半島の平和統一と北東アジアの和解のため、大韓聖公会並びに世界の諸教会と協働して取り組むこと」を決議している。管区ではこの総会決議を受けての具体的な活動を議論し、可能なことを模索している。2008年のランベス会議では、全世界聖公会に、今後の世界聖公会共通の平和の課題として朝鮮半島の統一問題や平和憲法問題について協働と支援の意思を確かめるきっかけとなった。

今回は沖縄を会場とし、原発問題と基地問題、憲

法9条と平和への取り組み、また分断状況の韓半島と参加各国の平和の取り組みについて学ぶ。世界は混沌とし、時にはどうしようもない諦めムードが支配的になっている。また痛みや悲しみに対して無関心であることが多い。この会議で学んだことを広く伝えていきたい。沖縄の地で今も踏みつけにされている人々の声、平和憲法を守っていくことの大切さ、また誰かを踏みつけにして自己保身を凶る態度を悔い改めていくことの大切さを世界に発信していければと考えている。米国聖公会キャサリン・シヨリー総裁主教の講演、沖縄の基地のフィールドトリップ、谷昌二主教（前沖縄教区主教）や内藤新吾牧師（日本福音ルーテル教会）からのメッセージなどが予定されている。日韓聖公会の長年にわたる協力・連帯の土台から大きな世界的なうねりへとなっていくことを切望している。

2013年

中高生キャンプ準備会

今年も8月19日から22日まで行われる中高生キャンプの準備のために、スタッフの青年たちが自主的に聖書の学びを始めている。準備会は教会などで不定期に行

われているようだが、今回1月20日（日）に神愛教会で行われた佐々木道人司祭による聖書の学びの会を取材させていただいた。



気になった点などを話し合った。

最後に「はじめはよく分からなかったけど、時代背景やユダヤ教の意味を教えてもらって、もう一度読むと違う感じ方で読めた」とや

「難しかったけど、また読んでみたいと思った」といった感想があり、佐々木司祭の「聖書は『イエスの死』を神の愛と解釈して生き方が変わった人たちが書いたものであり、キリストの体である教会は十字架につけられた時にできた穴があいているということ、そこから多くの人が、痛みのある人たちが出入りできる場だと思おう」というメッセージで閉じられた。（広報委員会）

まず、自己紹介の後、佐々木司祭が聖ルカ礼拝堂のチャプレンの時に書いた「あの子と共に」という「辛い経験をした時、祈られることによつて気持ちが和らいだ」という文章を読みながら、祈ることの意味を語った。

次にヨハネ福音書の「カナの婚礼」等の箇所を読み、

ようこそ聖愛教会へ



聖愛教会は、小田急線の祖師ヶ谷大蔵駅と成城学園前駅のほぼ中間の静かな住宅地にある木造のこじんまりした教会で、今年創立124周年を迎えました。

1889年、麹町にタムソン・コール師によってグレース・エピスコパ

ル・チャーチ（博愛教会）として創立され、1901年に聖堂聖別式が行われた時から聖愛教会と称するようになりまし

た。日本の教会が宣教も経済面も海外の母教会に依存していた頃、日本聖公会で最初の自給教会となりました。アメリカから帰国した元田作

ど、困難に満ちた時期を経て、1949年現在の地に移転しました。立教小学校の校舎の一部を移築して小さな聖堂が建てられ、その後数回の増改築を経て現在の姿になっています。



1967年、ファー

ザー竹田（鐵三神父）が当教会牧師であった時に創刊された教会の広報誌「聖愛の友」（ほぼ月刊）が現在も

で465号に達しました。題字はファーザーの揮毫そのまま使っており、宣教や活動記録、親睦の働きを担っています。

婦人会を発展的に解消した全信徒の会「グレース会」が月一回開かれ、昨年は献

金先になっているESAAアジア教育支援の会や、カパティランの活動についてスタッフの方を招いてお話を伺いました。より身近に感じられ、応援する気持ちが強まりました。今年は「ぶどうのいえ」のお話を伺い

ます。5月には中庭で「ローズパーティー」を開催、かつて聖愛に集っていた方や近隣の方々も交えて楽しいお茶会を催しています。被災地支援のコンサートの開催や現地の訪問、品物の取り寄せなど、各々が出来る支援活動が続いています。

かつて盛んだった日曜学校ですが、数年前から子どもたちの声が始ど聞こえなくなっていました。そこで「日曜学校プロジェクト」で話し合いを重ねて、昨年

に再スタートし、少しずつですが軌道に乗り始めています。神さまの見守りのもと、諸先輩の精神を引き継いで日々活動しています。

（ジョアンナ 小林悦子）

《信徒リレーエッセイ》

不肖の三代目として

東京聖テモテ教会

堀内 弘之

東京聖テモテ教会の信徒の三代目として生まれ、結婚式も教会で挙げたのですが、その後30年余、相次ぐ転勤などですっかり神様や教会にご無沙汰してしまいました。そんな私が教会にもどるきっかけになったのは7年前の母の死でした。母も晩年は教会にはご無沙汰で、しかも東京を離れた病院で亡くなりました。

非常に迷った末に思い切って教会へ電話したところ、初めてお会いする竹内司祭と笹森司祭が車を運転して直ちにかけて下さいました。そして葬送式から埋葬にいたるまで、両司祭とこれまた初めてお会いする信徒の皆様が、心をこめて執り行っ

て下さいました。母が教会に戻るようになっているように感じて主日礼拝に参列するようになりました。祈りを通じてそして教会委員や聖歌隊の役割を通じて、母や祖父母が受けた恩寵を少しでもお返しできればと願っています。

感謝―退職に際して―

司祭 山野 繁子

「主を待ち望め、心を強くして…」(詩編第27編18節)

思えば後先も考えずに、三十代後半で神学を学ぶという冒険に乗り出したわたしは、今日まで本当に多くの方に支えられて歩んでくることができました。この紙面をお借りして言葉に尽くせない感謝をお伝えしたいと思います。

少し以前のことでありますが、2000年12月26日から翌2001年1月6日にかけて、「ミレニアム・ノベナ(新千年紀へ向けて9日間の礼拝)」と名づけられた祈りの巡礼が、東京教区で行われたことを記憶しておられる方があられると思います。第1日目「私たちの口を開いてください」(聖アンデレ教会)、第2日目「声なき叫びを聴かれる神」(東京聖三一教会)、第3日目「隔ての壁を打ち砕かれた主」(三光教会)、第4日目「人に命を与えられた造り主」

(目白聖公会)、第5日目「平和の主に従う群たち」(聖アンデレ主教座聖堂)、第6日目「涙する人」とともにある主」(神愛教会)、第7日目「すべてを新しくされる命の風」(小金井聖公会)、第8日目「アジアの歴史に立たれる神」(立教学院諸聖徒礼拝堂)、第9日目「主と共に歩む新千年紀」(聖アンデレ主教座聖堂)と、年末と年始にかける日々、大胆な祈りの集いが開かれていきました。全体を包むテーマ「平和と和解を祈りながら」の下に、夕の祈り、聖書朗読と証言に耳を傾ける礼拝、黙想を中心とする礼拝、共同懺悔と派遣を中心とする礼拝、そして最後は聖餐式と、さまざま



まな礼拝を多くの教会の方々と共に経験するとういう貴重な時間でした。このように豊かな礼拝が短い時間の中で準備されたのは、その当時教区内で日常的に幅広い宣教的な働きが展開されていたからだと思えます。いくつかの例をあげると、日韓交流・日韓在日プロジェクト、教育奉仕ワーキング・グループ、「障害者」プロジェクト、聖公会AI D Sプロジェクトなどが、具体的な活動の中で積み上げられた交わりと祈りを分かち合う礼拝でした。「教区は教会とどうつながっているのだろうか」という問いを、これまで何回も聞いたように思います。各個教会やさまざまなグループが抱えているビジョン、希望や課題が分かち合われ、信仰の交わりが深められ、聖霊

の風が自由に吹いて、キリストの体が生きたものとなるように、今も招かれ促されていると信じます。制度的な変化を経験しなればならないときもあるでしょうが、この時代にふさわしく神と人々に仕えるとき、生き生きとした教会の姿が、

生まれくるのではないのでしょうか。その働きの多様性を認め、神への感謝と互いへの深い敬意をもつて強め合える関係が教区の中で創り上げられることを祈り続けます。

次回 ペンテコステ号

5月19日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア (六)

1. 男か女か

男「いいかい、イエスさまの12弟子はみんな男だったんだよ。男の方が女より偉いと思うよ」

女「でも、イエスさまが捕まったとき、みんな逃げちゃったじゃない。十字架の時にそばにいたのは女だけなのよ」

男「うん、まあ、それはそうだけど…あつ、そうだ用事を思い出した、じゃあ、また」

女「まったく、男は都合が悪くなると、すぐ逃げだすんだから」

2. いい牧師になるためには

後輩牧師「先輩、相談があるんですが」

先輩牧師「なんだい」

後輩牧師「一体どうしたらいい牧師になれるでしょうか」

先輩牧師「うーん、それは、祈るしかないだろうね」

後輩牧師「やはり、よく祈る牧師になることが大切なんでしょうか」

先輩牧師「いや、やさしい信徒ばかりの教会に派遣されますようにと祈るしかないんだよ」

3. 新しい教会に赴任して

牧師A「どうだい、新しい教会に赴任した感想は」

牧師B「なんだか、くじ引きの景品になったような気分だよ」

牧師A「くじ引きの景品？ どういう意味だい」

牧師B「みんなが“当たりか、はずれか”みたいな目で見るんだよ」